

1. 文学部

I	文学部の教育目的と特徴	・・・	1 - 2
II	「教育の水準」の分析・判定	・・・	1 - 4
	分析項目 I 教育活動の状況	・・・	1 - 4
	分析項目 II 教育成果の状況	・・・	1 - 12
III	「質の向上度」の分析	・・・	1 - 17

I 本学部の教育目的と特徴

文学部は、人類の長い歴史の中で培われてきた豊かな知的遺産に学びつつ、現代世界で生起する様々な現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す「場」である。以下に本学部の教育目的、組織構成、教育上の特徴及び想定する関係者とその期待について述べる。

(教育目的)

- 1 本学部は、広い知識を授けると共に、言葉と文化、人間の行動、歴史や社会に関する研究を行い、人間文化及び現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考能力、豊かな表現能力を有する人材の育成を目的とする。そして、こうした人材が、磨かれ鍛えられた能力を十分に生かして、積極的に社会に貢献することを目指している。
- 2 このような教育目的を達成するため、現行の中期目標では、「教育憲章」に掲げた、「人間性」、「創造性」、「国際性」及び「専門性」を身に付けた個性輝く人材を養成し、「豊富な研究成果を活かして、社会の変化を先導し、個人と国際社会が進むべき道を切り拓く高度な知識・能力を有する、次世代の研究者をはじめとした多様な人材の養成に努め、教育の更なる高みを目指す」ことを定めている。
- 3 以上のような人材を育成するために、本学部は、人文学の古典的な学問領域である哲学、文学、史学を学ぶ3講座と人間的知識と感性をシステムとして捉える知識システム講座、社会文化に関わる問題をフィールドワークを通して深めていくことを目指す社会文化講座を置き、徹底した少人数教育によって専門的能力を陶冶することに重点を置いた教育課程を編成している。

(組織構成)

これらの目的を実現するために、本学部は《資料1》のような構成をとっている。

《資料1：組織構成》

学 科	大講座	専 修
人文学科	哲学	哲学
	文学	国文学、中国文学、英米文学、ドイツ文学、フランス文学
	史学	日本史学、東洋史学、西洋史学
	知識システム	心理学、言語学、芸術学
	社会文化	社会学、美術史学、地理学

(教育上の特徴)

- 1 本学部は、少人数教育による課題探究能力の開発を重視している。具体的には、個別の主題を掘り下げる「特殊講義」などのほか、数人から十数人で行う「演習」が専修毎に豊富に用意されている。「実験」やフィールドワークを含む「実習」も同じく少人数で実施される。これらの授業において、共通の文献や資料を精読し、さらに自分で選択したテーマについて研究報告を行い、互いに議論を戦わせ深め合うことで、学生は各専門の研究姿勢・基礎知識・研究方法及び研究倫理等を習得する。またそれと同時に、自ら課題を発見し、解決する能力を磨くことができる。
- 2 本学部は、平成23年3月にオックスフォード大学東洋学部と学術交流協定を締結し、「神戸オックスフォード日本学プログラム」(略称KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program)として、平成24年10月からオックスフォード大学東洋学部日文学科2年生全員(12名)を受入れている(<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/graduate/kojsp.html>)。平成25年度からはハートフォード・カレッジにて夏季英語講習が神戸大学文学部と共同で実施されており、毎回20名前後の神戸大学生がオックスフォード大学で学んでいる。また、平成24年度からはじまった文部科学省グローバル人材育成推進事業「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」の一環として「グローバル人文学プログラム」を実

施している (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~global/index.html>)。これらの事業を中心に、本学部ではグローバル教育の一層の活性化を図っている。

(想定する関係者とその期待)

本学部は、受験生・在学生及びその家族、卒業生及びその職場・雇用者、並びに地域の高校等に関係者として想定している。これらの関係者は、本学部の人文学教育に対して、「人間の文化及び現代社会に対する深い教養、専門的知識、柔軟な思考力、豊かな表現力、そして国際性を有する人材の育成」を期待していると捉え、これに応えるべく教育を実施している。

II 「教育の水準」の分析・判定

分析項目 I 教育活動の状況

観点 教育実施体制

(観点に係る状況)

本学部は、上記 (p. 1-2) の目的を達成するために、1 学科 (人文学科) を設け、その下に学問分野の観点から 5 大講座を置いている《資料 1 (p. 1-2)》。教育組織の編成については、社会動向及び学問動向を勘案した上で専門性に応じた適切な教育を実施するために適宜見直しており、現行の 1 学科制は平成 13 年度に 3 学科から再編統合して新たに設置したものである。

教員の配置状況は、《資料 2》のとおりである。教育の単位となる 15 の専修にはそれぞれ 2 名以上の専任教員が配属され、演習・特殊講義・概論・入門・人文学基礎といった主要な科目を担当している。非常勤講師に担当を依頼している授業は、各専修の専任教員でカバーしきれない分野と、学芸員・教員などの免許・資格に関するものに限定されている。115 名の入学定員に対し専任教員は 54 名であり、大学設置基準が要求する専任教員数を十分に確保している。

入学者の選抜については、全学的な理念を踏まえながら本学部として求める学生像 (アドミッション・ポリシー) を定め《資料 3》、大学入試センター試験利用による基礎学力判断の後、個別学力試験では「国語」「外国語」「数学」(前期)、「外国語」「小論文」(後期) を課すことにより、理解力、読解力、語学力、問題解決能力、論理的思考力、表現能力などを総合的に判定することとしている。

学生定員と現員の状況については、《資料 4》のとおりである。在籍学生数は毎年学生定員を若干超過しているが、その数は、標準卒業年限を超える学生を含めて学生定員の 15% 以下であり、適正範囲である。

本学部では、1 年次を対象として、少人数ゼミ、オムニバス形式の講義、専門分野ごとの入門科目を開講しており、専門的知識の習得と共に、広い人文学的な視座の獲得が可能となっている。

以上のような教育の実施体制を点検し、改善していくため評価委員会を置き、授業評価アンケートの実施など、教育に関わる評価作業を行うだけでなく、教員の教育方法及び技術の向上を図るためにファカルティ・ディベロップメント (以下、「FD」と略称) を開催している。定期的な学生による授業評価アンケート、教員相互の授業参観・評価 (ピアレビュー) を行い、その結果は、FD において報告され、カリキュラム編成や授業方法の改善のために活用され、中期目標の実現に向けた教育課程の改善が図られている《資料 5》《資料 6》。さらに、毎年度、評価報告書を作成し、独自に外部評価を受け、達成点と改善点を的確に把握し、それを教員・職員間で共有することに努めている《資料 7》。

こうした活動を通して、個々の科目の授業内容を改善することはもちろん、カリキュラム構成や授業方法等の改善も頻繁に行っており、例えば、「グローバル人文学プログラム」を実施したことに加えて、「神戸オックスフォード日本学プログラム」で受入れているオックスフォード大学の学生が授業に参加することで、授業のグローバル化が進んでいる

(「質の向上度」の分析 I 事例①、事例② (p. 1-16) 参照)。

《資料2：教員の配置状況：平成27年5月1日現在》

学科	収容定員	専任教員数（現員）											助手		非常勤教員数	
		教授		准教授		講師		助教		計			男	女	男	女
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	総計				
人文学科	460	23	1	21	9	1	0	0	1	45	11	56	0	0	24	8

《資料3：求める学生像（アドミッション・ポリシー）》

神戸大学が求める学生像

神戸大学は、世界に開かれた国際都市神戸に立地する大学として、国際的で先端的な研究・教育の拠点になることを目指しています。

これまで人類が築いてきた学問を継承するとともに、不断の努力を傾注して新しい知を創造し、人類社会の発展に貢献しようとする次のような学生を求めています。

1. 進取の気性に富み、人間と自然を愛する学生
2. 旺盛な学習意欲をもち、新しい課題に積極的に取り組もうとする学生
3. 常に視野を広め、主体的に考える姿勢をもった学生
4. コミュニケーション能力を高め、異なる考え方や文化を尊重する学生

文学部が求める学生像

文学部では、人間がつくり上げてきた文化に対する好奇心を高め、多様な角度から人間存在の深みに光をあてる教育研究を行っています。各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につけた人材を育成することを目標にしています。そのため、次のような学生を求めています。

文学部の求める学生像

1. みずみずしい感受性と想像力を持っている学生
2. 言葉や文化、人間の行動、歴史や社会に対する幅広い関心と好奇心を持っている学生
3. 基礎学力、とりわけ論理的思考力、日本語および外国語の読解力・表現力、情報リテラシーを備えている学生
4. 既成の価値観にとらわれることなく、自分で問題を発見し、探求していくことができる学生

以上のような学生を選抜するために、文学部では、大学入試センター試験により総合的な基礎学力を測り、個別学力検査では「国語」「外国語」「数学」（後期日程にあつては、「外国語」「小論文」）を課すことにより、理解力、読解力、語学力、課題解決能力、論理的思考力、表現能力等を測ります。

《資料4：学生定員（収容定員）と現員の現況：各年度12月1日現在》

学科	年度	収容定員	現員	定員充足率（年）	定員充足率（中期）
人文学科	平成22年度	460	529	115%	113.6%
	平成23年度	460	529	115%	
	平成24年度	460	519	113%	
	平成25年度	460	524	114%	
	平成26年度	460	514	112%	
	平成27年度	460	520	113%	

《資料5：平成26・27年度のFD実施状況》

開催日	テーマ	参加者数
平成26年6月25日	FD懇談会「「ミッションの再定義」をどう読むか」	45
平成26年7月23日	FD講演会「LMSの紹介—ICTを用いた授業の支援」	45
平成26年11月26日	グローバルFD講演会「Facts and Fictions: On New Education in Poland」	46
平成27年2月18日	FD講演会「本学の教育改革について」	53
平成27年3月6日	FD講演会「平成26年度ピアレビュー結果の検討」	44
平成27年7月22日	神戸大学学修管理システム(BEEF)について	54
平成27年9月2日	初年次セミナー・アクティブ・ラーニングに関するFD	47

平成 28 年 1 月 13 日	FD 講演会「教員評価について」	41
平成 28 年 1 月 27 日	グローバル FD 講演会「This, That, or the Other? On Japanese Studies in Romania」	49
平成 28 年 2 月 2 日	グローバル FD 講演会「ヤゲウォ大学における国際化戦略」	41
平成 28 年 2 月 17 日	FD 講演会「障害者差別解消法と来年度からの神戸大学の体制」	46
平成 28 年 3 月 7 日	平成 27 年度ピアレビュー結果の検討及び授業評価アンケートの結果に関する FD	53

《資料 6：平成 27 年度 ピアレビュー実施結果 抜粋》

<p>(1) 実施期間：平成 27 年 6 月 22 日(月)～7 月 3 日(金)</p> <p>(2) 授業参観を行った教員数：31 名 (参加率：58%)</p> <p>(3) 参観を受けた授業数：1 名の参観者：12 2 名の参観者：8 3 名以上の参観者：1 (授業参観の対象科目は講義科目のみ。)</p> <p>(4) 授業参観レポートの集計結果</p> <p>1. 授業改善上、参考になった項目 (複数回答)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 説明のしかた・・・・・・・・・・・・・・・・ 26 ○ 配布資料・板書などの視覚資料・・・・・・ 24 ○ 学生とのインタラクション・・・・・・・・ 11 ○ TA の使い方・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 <p>2. 自由な感想の主な内容 (特に参考になった点)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ PPT のスライドに穴埋めの箇所を作って印刷・配布し、学生に書き込み作業を行わせていた点が参考になった。 ○ 前回の授業で提示した設問に答えるところから授業をはじめ、議論を展開し、さらに新たな設問を提示して次回につなげる授業を行っていた。 ○ 前回の作業レポートをもとに授業を組み立て、作業の再提出につなげるという学生との相互交流を重視する授業が印象に残った。 ○ 配布資料が工夫されていた。大・中・小の項目に分かれていて、「今何を話しているのか」が非常にクリアであった。 ○ 授業の本題に入る前に、関連する情報を話し、学生の理解を助けていた。 ○ 3D メガネを用いて写真を立体的に浮かび上がらせる趣向など、受講生が主体的に講義に参加していける工夫が随所に施されていた。 ○ 私語を続ける学生への注意の仕方、学生との対話型授業など参考になる点が多かった。 ○ TA が授業前に配布資料の準備やホワイトボードのマーカーの補充を行い、授業が円滑に進行するよう配慮が行き届いていた。

《資料 7：平成 22～27 年の外部評価実施状況》

実施日	外部評価委員
平成 22 年 5 月 14 日	井上健 (東京大学教授)、柳教烈 (韓国海洋大学教授)
平成 23 年 5 月 18 日	小田部胤久 (東京大学教授)
平成 24 年 4 月 27 日	山本弘明 (名古屋文理大学教授・名古屋大学名誉教授、元名古屋大学文学研究科長)
平成 25 年 7 月 6 日	三角洋一 (大正大学特任教授・東京大学名誉教授)
平成 26 年 6 月 28 日	深澤克巳 (東京大学教授)
平成 27 年 6 月 27 日	立花政夫 (東京大学名誉教授、元東京大学人文社会系研究科長)

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

基本的組織の構成については、固有の学問体系をもつ専修を基本としつつ、現代社会の動向を踏まえ、必要に応じて講座の編成替えや講座間の有機的な連携が行われている。また、教員組織についても、教育目的を達成する上で質的・量的に十分な教員が適切に配置されている。入学者選抜は、アドミッション・ポリシーを踏まえながら、今後の改革に向けた取組みに積極的に着手している。内部的な教育の質的保証については、例えば、入念な FD の実

施によって学生のニーズを的確に把握した上で、教育課程と方法を見直すなど、体制の改善に取り組む実績を上げている。さらに、独自に外部評価を受けていることも、本学部が積極的にFDに取り組んでいることを示している。以上により、本学部の教育の実施体制は、期待される水準を上回ると判断する。

観点 教育内容・方法

(観点に係る状況)

本学部では、ディプロマ・ポリシー (DP) において、学生が卒業までに達成を目指す目標を定め《資料8》、これを実現するために、以下のような教育課程を組んでいる。

《資料8：ディプロマ・ポリシー (DP)》

文学部 学位授与に関する方針

神戸大学文学部は、人類の文化的営みの蓄積としての人文学を、古典を通して深く理解するとともに、社会的対話によりそれを実践していくことのできる人材を育成することを教育上の目的としている。また、徹底した少人数教育により、個々の学生の好奇心に応え、自ら問題を設定し、解決するスキルを学生に伝授することを目指している。

この目標達成に向け、文学部では、以下に示した方針に従って学位を授与する。

- ・ 文学部の学生は、所定の単位 (卒業論文を含む) を修得しなければならない。卒業論文の単位修得のためには、指定の期日までに卒業論文を提出し、卒業論文試験に合格することを要する。
- ・ 文学部に在籍する学生が修了までに達成を目指す目標は、次の通りとする。
 - ・ 各自の好奇心を学問的に問題化し検証する訓練を積むことで、人文学の幅広い知識と深い洞察力を身につける。
 - ・ 人文学共通の問題・課題を、人類の知的営みの蓄積である古典を通じて理解する。
 - ・ 文化・言葉・学域の壁を越えた意思疎通および連携を可能にする社会的対話力を身につける。

(<http://www.kobe-u.ac.jp/campuslife/edu/policy/diploma-policy/undergrad-letter.html>)

教育課程は、「専門科目」及び「専門科目以外の科目」で構成されている。「専門科目以外の科目」は、「全学共通科目」である教養原論、外国語科目、情報科目、健康・スポーツ科目及び「資格免許のための科目」から成り、多様な授業科目を開講すると共に教育職員免許及び学芸員資格を取得するために必要な授業科目を提供している。「専門科目」は、演習と講義形式による概論、特殊講義を中心に構成され、多彩な研究領域に対応する多様な内容、形態の授業科目が置かれている。以上の形で、幅広い知識と深い洞察力を身につけることができるようにしている。

本学部では、新入生全員を対象とした導入教育として、1年次前期に5つの講座がそれぞれ入門の講義を行うと共に、「人文学導入演習」を複数開講し、その後の学修に必要とされる基本的な視座や研究・学習方法の基礎を実践的に身につけさせている。また1年次後期には15の専修がそれぞれ開講する「人文学基礎」においてより具体的・専門的な研究内容を学ぶ授業を提供している。本学部の学生は、このようにして人文学の基礎を学び、人文学共通の問題と課題を理解し、それを踏まえて15専修の中から1専修を選び、その専修において、徹底した少人数教育を通して専門的能力を陶冶し、さらに、各専修の中に複数ある専門分野の中で自身の関心を絞り込んで卒業論文を作成することになっている。

「専門科目」の内容としては、例えば、「哲学演習」では、ドイツ語論文を精読することで文献読解力の向上を図ると共に学生間の議論を通して問題探求能力を高めることを目指

した《別添資料1：哲学演習シラバス》。

本学部の教育方針を明確化するため、平成18年度には履修モデルケースを専修毎に作成し提示した。

本学部では、グローバル化が進む現代社会における諸問題に対応し、また社会からの要請に応えるため、《資料9》のような取組みを実践している。

《資料9：学生の多様なニーズ、社会からの要請に対応した教育の取組》

他学部の授業科目の履修：本学部では、他学部の専門科目を本学部開講専門科目の自由選択科目と同等に扱い、卒業要件単位として認めている。本学部生は、一定の要件のもとで、本学部の専門科目と他学部の専門科目から30単位を自由選択科目として修得し、卒業に必要な単位とすることができる。

他大学との単位互換：本学部は、全学協定及び部局間協定に基づき海外の大学と単位互換協定を締結している。この制度に基づく平成22～26年度の学生交換の実績は、派遣15名、受入れ40名である。交換留学等によりこれら海外の協定校で取得した単位のうち60単位までを卒業に必要な単位として認定することで、より積極的な留学を支援している。

実践的な英語能力を重視した授業科目の開講：平成20年度からは、語学科目以外に全てを英語で行う授業科目を開講し、アカデミックかつ実践的な英語能力の涵養を目指している。具体的には、英米文学及び言語学関係の外国人教員による授業（「比較現代日本文化論特殊研究」「アカデミック・ライティング」等）を平成23年度から継続的に行っている。また、社会学分野では平成24年度から、英語による専門授業を開講している。

語学学習への多様な支援：平成24年度から本学部の全学年にTOEFL iTPの無料受験を実現し、海外留学や国際交流への意識向上を図っている。また、英語のスキル向上のために、希望者には「英語アフタースクール」を実施し、能力や志向に応じた細やかな語学学習が可能となっている。

アクションリサーチ型授業の開講：本学部、発達科学部、経済学部、農学部、国際文化学部、工学部及び医学部が共同で実施する「神戸大学ESDコース」の授業科目として、本学部では「環境人文学」を開講し、広く環境問題に関わるアクションリサーチ型演習と講義を行っている。持続可能な社会のためには、特に市民・住民によるイニシアチブが重要であることを踏まえ、ボランティア活動やNPO活動といった事例を積極的に講義で扱っている。

地域との連携による新たな教育研究の開発：地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成を目的とした「地域歴史遺産保全活用基礎論A・B」「地域歴史遺産保全活用演習A・B」を本学部専門科目として開講し、史料の保全と活用を通じて、地域との有機的な交流がなされている。なお、この事業は、平成22～24年度の間、文部科学省より特別経費（特別研究プロジェクト事業「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」）を受けながら推進された。

文部科学省グローバル人材育成推進事業等採択に基づくグローバル教育への取組：本学部では、神戸オックスフォード日本学プログラムなどによって、国際的な場で活躍できる学生を育成してきたが、平成24年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプB特色型）」に採択された「問題発見型リーダーシップを発揮できるグローバル人材の育成」プログラムに基づき、「グローバル人文学プログラム」を実施してグローバル教育を積極的に推進している（「質の向上度」の分析項目I事例①②（p.2-17,18）参照）。

単位互換協定を締結している海外の大学 平成27年3月現在

協定校	国名	大学間協定	部局間協定
ヤゲヴォ大学	ポーランド		○
山東大学	中華人民共和国	○	
中山大学	中華人民共和国	○	
木浦大学校	大韓民国	○	
成均館大学校	大韓民国	○	
ワシントン大学	アメリカ合衆国	○	
バーミンガム大学	連合王国	○	
韓国海洋大学校	大韓民国	○	
パリ第10（ナンテール）大学	フランス	○	
鄭州大学	中華人民共和国		○
グラーツ大学	オーストリア	○	
中国海洋大学	中華人民共和国	○	

西オーストラリア大学	オーストラリア	○	
カレル大学	チェコ	○	
浙江大学	中華人民共和国		○
ロンドン大学東洋アフリカ研究学院	連合王国	○	
復旦大学	中華人民共和国	○	
香港大学	中華人民共和国		○
ハンブルク大学	ドイツ		○
北京外国語大学	中華人民共和国	○	
武漢大学	中華人民共和国	○	
リヨン高等師範学校	フランス	○	
ソウル国立大学校	大韓民国	○	
上海交通大学	中華人民共和国	○	
清華大学	中華人民共和国	○	
ライデン大学	オランダ	○	
クイーンズランド大学	オーストラリア	○	
ピッツバーグ大学	アメリカ合衆国	○	
国立台湾大学	台湾	○	
パリ第7（ドニ・ディドロ）大学	フランス	○	
サウスフロリダ大学	アメリカ合衆国	○	
オックスフォード大学	連合王国	○	
ヴェネツィア大学	イタリア	○	
華東師範大学	中華人民共和国		○
ソフィア大学	ブルガリア	○	
パリ第2（パンテオン・アサス）大学	フランス	○	
オタワ大学	カナダ	○	

授業形態は、主として講義・演習からなり、平成26年度の開講科目数は講義科目が205（約45%）、演習・実習科目等が247（約55%）となっており、おおむね例年並みである《資料10》。演習科目が多いのは、人文学の学問の根幹をなす文献読解能力、資料調査分析能力、表現力の鍛錬に重点を置き、研究の集大成として卒業論文を重視する、本学部の教育目的に沿う措置による。

平成26年度は、34の講義、53の演習、13の実習科目に対してTAを配置し、授業運営の補助や受講者のための事前学習・事後学習のフォローを適宜行わせ、少人数教育の一助としている《資料11》。

《資料10：平成27年度の授業形態》

授業形態	講義	演習	実習	実技	研究指導
授業数	215	238	7	2	2

《資料11：平成22～27年度のTAの配置状況》

授業形態	TA配置人数					
	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
講義	44	38	36	32	34	25
演習	87	83	83	59	53	78
実習	5	5	9	9	13	10
実技	0	0	0	0	0	0

教育を展開する上での指導法の工夫として、例えば、「地域歴史遺産保全活用演習B」では、事前指導で古文書・絵図等の取扱いを学んだ後、実際の地域歴史遺産資料を用いた実習を行うことで、地域遺産の保全と活用に関する実践的な知識・技能を得ることを目指している《別添資料2：「地域歴史遺産保全活用演習B」シラバス》。

また、少人数の演習によるアクティブ・ラーニングに加えて、「グローバル・アクティブ・ラーニング」として、他大学の学生らと共に学外のワークショップに参加し、より開かれた場での討論に参加し、公開成果発表会でプレゼンテーションを行うことで、受講生にさらに

積極的な学びの場を提供している《別添資料3：「グローバル・アクティブ・ラーニング」シラバス》。

シラバスは、すべてウェブサイト上に公開しており、学習の便宜を図っている《別添資料1～3》。「履修要項」には履修モデルを提示しているが、平成27年度版の履修要項には最新のモデルを提示した《別添資料4：神戸大学文学部履修モデル》。加えて、入学時、1年次の後期開始時、専修配属決定後の12月に合計3回のガイダンスを行うことによって、学生が適切な履修計画を立てられるように配慮している。

また、オフィスアワーやラーニングコモنزの設置（質の向上度 事例③参照）など制度面・環境面の整備を行ってきた《資料12》。

《資料12：制度面及び環境の整備項目》

項目	内容	
制度面	オフィスアワー	学生は授業時間以外にも教員から勉学上の指導を受けることが容易である。オフィスアワーは平成20年度からはシラバスに記入され、周知されている。
	キャップ制の免除	単位の実質化を図るためにキャップ制を設けるとともに、さらに学生の学習意欲を高めるために、成績優秀な学生に対しては、キャップ制の適応を免除する優遇措置を与えている。
	表彰制度	平成19年度から本学部同窓会がレポートコンテストにより「文窓賞」を授与している。
環境面	図書館 (日本文化資料コーナー)	本学部の人文科学図書館は書籍約30万冊を有し、毎年確実に蔵書数を増やしている。授業期間中は、平日(8時45分～20時)及び土曜日(10～18時)、試験期間中は、平日の夜間(21時まで)及び日祝日も開館している(10～18時)。 「日本文化資料コーナー」を設けて資史料、貴重図書、レファレンス類を集中的に配架し、複数の辞書類・資料を同時に縦覧する必要がある歴史・文学系等の学生の利便を図っている。
	学生用共同研究室	学生が個人あるいはグループで調査・研究するために使用できる「共同研究室」を教育研究分野ごとに設置し、学生の自主学習へ配慮している。
	コモンルーム	学生がグループ学習や研究会などのために自由に使用することのできる「コモンルーム」を3カ所設置し、学生の自主学習へ配慮している。
	共同談話室	教員と学生が共同研究、読書会など行うために使用することができる「共同談話室」を5カ所設置し、自由な共同学習や演習等の授業に活用している。
	情報機器	学生が利用できるパーソナル・コンピューターを「情報処理室」(平成22年度B棟に移転・拡充)に48台、人文科学図書館に18台を設置するとともに、各専修の共同研究室や実験室などにも適宜配置している。
	教育機器	視聴覚機材を平成21～23年度B棟に、平成24年度C棟に設置し、ほとんどの教室で視聴覚機材(プロジェクター、スクリーン、DVDなど)を使った授業ができるようになった。
	ラーニングコモنز	自由に机と椅子を組み合わせ、図書館資料を自由に使用し、グループで話し合いながら学習を進めることができるスペースとして、「ラーニングコモنز」が人文科学図書館に設置された。平成25年度から運用が始まり、自主学習や演習等の授業に活用されている。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部において期待される知識・能力を涵養するために、まずは大きな枠組みにおいて初年次教育を行い、広い視座を獲得させると共に、徐々に専門的な教育・研究内容に触れることができるような配慮がなされている。そして明確なディプロマ・ポリシーに基づき、4年一貫で人文学の多様な広がりや高度な専門性の両面を有機的に関連させ、古典から学ぶと共に社会的対話力を養うための教育課程が編成されている。また、演習を中心とした綿密な少人数授業に力点を置くことで、学生の資質や興味に対応した教育が実践できている。さらに、オフィスアワーの整備やラーニングコモنزの開設などの制度・環境面の整備により、教員とのきめ細やかで充実した交流と、学生の自主的な学習や実践が可能となっている。英

神戸大学文学部 分析項目 I

語学習・留学支援といったグローバル化への対応、「グローバル人文学プログラム」や「神戸オックスフォード日本学プログラム」を活用したグローバル教育の充実、そしてアクションリサーチや地域連携といった社会からの要請に応えた多様な取組みとも相俟って、本学部の教育の内容と方法は、期待される水準を上回っていると判断される。

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

観点 学業の成果

(観点に係る状況)

最近5年間の本学部学生の卒業状況は、《資料13》のとおりである。本学部学生の卒業率(入学者総数に対する既卒業者の比率)は平成19年度入学者以降、平均92.5%という良好な数字を保っている。また、標準修業年限で卒業した学生(4年間で卒業した学生)の比率も平成19年度入学者以降、平均78%以上の数字を維持し、4分の3以上の学部生が、4年間で卒業している。なお、学部生の場合、卒業以前に留年・休学して海外留学を経験する者も多い。

また、卒業生の中には、在学中に教育職員免許(中学校教員一種・高等学校教員一種)、学芸員資格、社会調査士資格等を取得する者が多く、その内訳は《資料14》のとおりである。これらのうち、高等学校教員一種の資格取得者が多いのは例年の傾向であるが、平成26年度の40名は、ここ数年では驚異的な数字として注目される。その意味で平成26年度は、就職に向けた解禁日が遅くなったものの、あくまで経団連所属の大企業への適用のみであり、教育実習期間に中小企業の面接が入るなどで実習辞退者が出るといった影響もみられ、今後の問題を残している。

《資料13：修業年限内の卒業率 平成27年3月現在》

入学年度 (標準修業年度)	入学者総数 (a)	既卒業者数 (b)	既卒業率 (b/a)	標準年限内 卒業業者数 (c)	標準年限内 卒業率 (c/a)
平成19年(平成22年)	123	118	95.9%	94	76.4%
平成20年(平成23年)	120	115	95.8%	88	73.3%
平成21年(平成24年)	120	111	92.5%	89	74.2%
平成22年(平成25年)	121	99	81.8%	99	81.8%
平成23年(平成26年)	117	113	96.6%	99	84.6%
平成24年(平成27年)	119	107	89.9%	103	86.6%

《資料14：平成22～27年度資格取得者一覧》

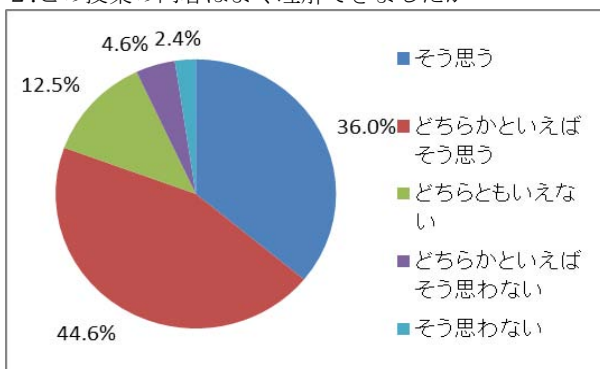
年度	資格取得者数			
	教育職員免許		学芸員資格	社会調査士 資格
	中学校一種	高等学校一種		
平成22年度	21	32	13	2
平成23年度	16	23	9	8
平成24年度	15	19	15	3
平成25年度	22	30	6	1
平成26年度	26	40	16	5
平成27年度	15	28	14	0

在学生を対象とした「授業振り返りアンケート」平成27年度後期の結果では、教育の成果や効果に関する質問項目の「2. この授業の内容はよく理解できましたか。」「3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか。」のうち、2については最上点及び次点の回答者が80.6%、3については最上点及び次点の回答者が64.3%といずれも良好な結果が得られており《資料15》、例年、同様の傾向となっている。

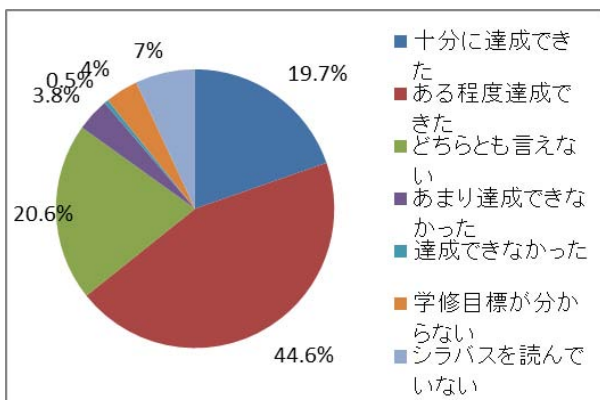
また、平成26年度の卒業時アンケートでは、幅広い教養と深い専門知識の双方で、概ね身についたという回答が得られた。また、課題を設定して解決する能力も身につけていることがわかった。その理由として、各専修における少人数教育や様々な分野の専修における専門知識に触れる機会が与えられていることなどが挙げられた《資料16》。

《資料 15 : 「平成 27 年度後期授業振り返りアンケート」結果 (抜粋)》

2. この授業の内容はよく理解できましたか

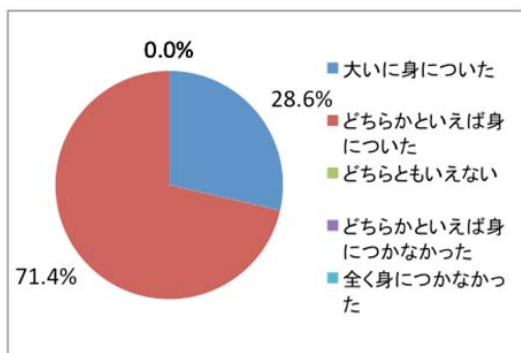


3. シラバスに書かれている到達目標をあなたはどの程度達成できたと思いますか

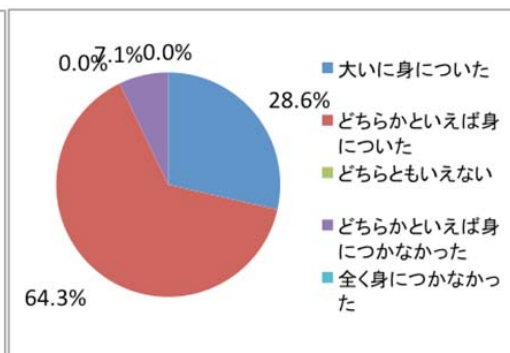


《資料 16 : 「平成 26 年度文学部卒業時アンケート」結果 (抜粋)》

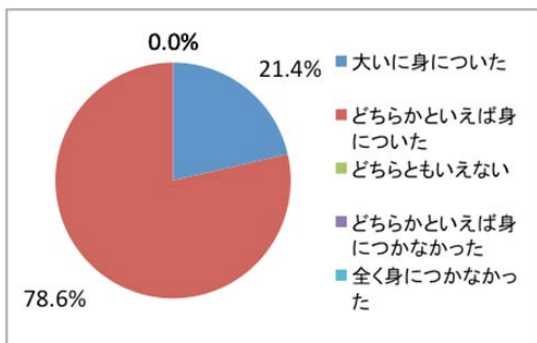
1. 「幅広い教養」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



3. 「深い専門知識・技能」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



11. 「課題を設定し解決していく能力」について、あなたは4年間の学士課程において、どの程度身についたと思いますか



32. 神戸大学で受けた教育に満足している理由

(事例1) 様々な分野の学問に触れることで、幅広い教養及び自己の価値観を養うことができた。
 (事例2) 所属専修が少人数であったため
 (事例3) 高い専門性を備えた教授の講義を生で聴いたり、時には直接指導していただく機会を得られたことで、自分一人では絶対に見つけられなかったであろう考え方や視点へと目を向けることができたから

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

本学部学生の卒業率及び標準修業年限での卒業率はいずれも高い水準で推移している。また、学業の成果に対する学生の評価についても満足度は高く、学生は本学部の教育を通じて学業の成果を十分に獲得しているものと判断できる。以上のことから学業の成果は期待される水準を上回ると判断する。

観点 進路・就職の状況

(観点に係る状況)

本学部卒業生の就職率及び進学率については、《資料17》のとおりであり、この状況はここ数年安定している。平成22～27年度の本学部における卒業生の進路は、《資料18》のとおりである。教員・公務員・メディア関係など、本学部での教育成果を利用しうる職種のみならず、金融・保険業、製造業、情報・通信業、公務員など、幅広い業種にわたっていることがわかる。

《資料17：本学部卒業生の就職率及び進学率》

卒業年度	卒業生数	進学者	就職者	就職希望者	進学率	就職希望者の就職率
平成22年度	117	17	87	100	14.5%	87.0%
平成23年度	120	15	78	105	12.5%	74.3%
平成24年度	117	11	80	106	9.4%	75.5%
平成25年度	131	12	94	119	9.2%	79.0%
平成26年度	113	19	88	95	16.8%	92.6%
平成27年度	121	16	94	105	13.2%	89.5%

《資料18：本学部卒業生の進路状況》

卒業年度	製造業	情報・通信産業	卸売・小売業	金融・保険業	学校教育・その他教育	国家公務員・地方公務員	その他の業種
平成22年度	9	17	9	14	10	16	12
平成23年度	14	12	8	10	12	12	10
平成24年度	9	16	8	12	10	12	13
平成25年度	13	11	12	15	12	11	20
平成26年度	15	10	10	12	18	9	14
平成27年度	11	6	4	21	10	19	23

本学部及び人文学研究科は、卒業生・修了生が勤務する職場の責任者に対してアンケート調査を行った。平成22年度には公務員（教員を除く）、平成23年度には教員を対象に、それぞれ勤務する職場について調査した《資料19》。いずれのアンケートでも、本学部卒業生の仕事ぶりや職務の遂行に持つ資質について高い評価が与えられており、今後も採用したいとの良好な回答が多い。

《資料19：「卒業生・修了生の勤務先に対するアンケート調査」の結果（抜粋）》

問8 神戸大学文学部または大学院の卒業生の仕事ぶりで評価できる点（1つを選択）

設問	公務員		教員	
	回答数	%	回答数	%
問題に対する深い理解	4	15.4	6	20.7
論理的な思考態度	8	30.8	11	37.9
思考の独創性と柔軟性	2	7.7	7	24.1
辛抱強く問題を解決しようとする態度	8	30.8	2	6.9
優れた文書作成能力	2	7.7	2	6.9
無回答	2	7.7	1	3.5
合計	26	100.0	29	100.0

問9 職務の遂行に持つ資質（複数回答）

	回答数	
	公務員	教員
仕事の正確さ	7	9
発想の独創性	2	6
理解力の早さ	12	5
向上心の強さ	7	3
仕事にたいする熱意	6	16
協調性	6	8
奉仕の精神	2	1
用意周到さ	2	1
辛抱強さ	1	2
無回答	1	1
合計（回答者数）	46 (26)	52 (29)

問10 卒業生全体への印象（複数回答）

設問	回答数	
	公務員	教員
仕事熱心である	14	9
知識が豊かである	4	5
社交的である	2	13
周囲の人への思いやりがある	7	1
社会に対する奉仕や貢献に積極的である	1	9
職場の将来を任せられる素質がある	12	3
その他	1	8
無回答	2	2
合計（回答者数）	43 (26)	50 (29)

問14 今後、神戸大学文学部・人文学研究科の卒業生・修了生を積極的に採用したいと思うか

	公務員		教員	
	回答数	%	回答数	%
積極的に採用したい	9	34.6	14	46.7
採用してもよい	12	46.2	11	36.7
無回答	5	19.2	5	16.7
合計	26	100.0	30	100.0

企業への意見聴取については、本学部に設置した自己点検・改善委員会において、教育改善方針検討の一助として、卒業生の就職先企業等の人事担当者に対して神戸大学卒業生・修了生に関するインタビュー調査を行い、概ね高い評価を得た。《資料20》。

《資料 20：神戸大学卒業生・修了生に関するインタビュー調査結果（抜粋）》

損害保険会社人事担当者（平成 25 年 8 月聞き取り）

- 大雑把な印象を言えば、神戸大学出身者は基礎学力が備わっている。
- しかるべき語学力を身につけ、短期・長期を問わず留学経験を有する学生は、もはや当たり前で、求められるのは、判断力・発信力・行動力である。
- グローバル化に対応して求められるのは、語学力ではなくて、むしろ、思いがけない世界の多様なニーズに対処できる能力である。知識偏重を逆手に取った大胆な人材育成のためのシステムや工夫が求められている。

情報通信会社人事担当者（平成 25 年 9 月聞き取り）

- 企業インタビューなどを介して、今後も神戸大学と連携を深め、相互理解の機会にしたい。
- 経験豊かで個性的な人材を求める。就職のためだけのポーズではなく、ほんとうに自身の生き様をたえず反省的に追い求めてほしい。自分自身を冷静に見つめることも求められる。ストレスに打ち勝つ精神力も望まれる。
- グローバル人材として備えておくべき様々な資質は重視するけれど、全員、総合職として採用され、最初から仕事内容や配属を限らず、グローバル人材だからといって重用することもない。
- 通信事業の世界展開において、不測の様々な事態に直面するが、その時何よりも重要なのが早期復旧・再発防止である。したがって、グローバル人材として求められる資質は、直面する事態に明確な目的意識をもって対処する能力であり、これは社員全員に求められるものである。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

大学院進学者が 10～15%という状況は、「専門的知識」を有する人材の育成を目的の一つに掲げている本学部の教育方針に合致しており、同時に社会からの期待にも適ったものと判断できる。また、就職状況は良好であり、卒業生及び就職先の関係者に対する意見聴取の結果からも、本学部の教育が概ね良好な効果を挙げていることが確認できた。

以上のことから、本学部の進路・就職の状況は期待される水準を上回ると判断する。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

事例① 教育プログラム「神戸オックスフォード日本学プログラム」

神戸大学は2011年にオックスフォード大学と学術交流協定を結び、それと同時に本学部とオックスフォード大学東洋学部との間で「神戸オックスフォード日本学プログラム(略称KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program)」に関する協定を締結した。このプログラムは、オックスフォード大学東洋学部日本学科の2年生全員(12名)が1年間を本学部で学ぶという、ユニット受入れ型のプログラムであり、本学部とオックスフォード大学東洋学部との間の綿密な連絡・連携のもとに実施されている。このプログラムで、オックスフォード大学生は午前中に日本語の授業を受講し、午後は本学部の様々な授業を他の学生と一緒に受けている。全員が参加する「KOJSP 演習」では、各自が自由に課題を選び、指導教員や学生チューターと共に日本の諸相についての研究を進めていく。そして、その成果をプログラム修了時の発表会で披露することになっている。この授業で選んだ課題をオックスフォード大学での卒業論文とする学生も少なくない。

このプログラムによってオックスフォード大学生の日本語能力、日本文化・社会に対する理解は飛躍的な向上を見せており、その成果は派遣元であるオックスフォード大学東洋学部から極めて高い評価を受けている《資料21》。オックスフォード大学生の修了後のアンケートでも、このプログラムが非常に有益であったとの回答を得ている。また、学習・生活面でのサポートを本学部の学生チューターが担うなど、世界最高レベルの学生と共に勉学し、学生生活を過ごすことで、本学部の日本人学生に対しても大きな影響を与えており、勉学に対する意識を高め、国際的な視野を獲得することに貢献している《資料22》。

《資料21：オックスフォード大学東洋学部からの極めて高い評価》

神戸大学 HP に掲載されたニュースから抜粋：

- 「懇談の冒頭で、ハミルトン学長から「神戸オックスフォード日本学プログラム」は大変素晴らしく、神戸大学で学んだ学生から非常に有意義な時間を過ごしたとの報告を受けており、深く御礼を申し上げたい、との言葉がありました。また、是非とも今後も「神戸オックスフォード日本学プログラム」を継続して実施したい、との意向も示されました。」

(参照：http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/topics/t2013_10_17_01.html)

- 「フレシビック教授は、神戸オックスフォード日本学プログラムの実施状況がきわめて順調であり、現在このプログラムに参加しているオックスフォード大学日本学専攻学生10名の満足度も非常に高いことに対して感謝の意を表した後、オックスフォード大学と神戸大学の学術交流をますます盛んにするため、ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies)の会長として2016年の国際大会を神戸大学で開催したい旨を述べ、武田学長もそれに協力することを約束しました。」(参照：http://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/info/2015_06_30_02.html)

《資料22：KOJSPに関するオックスフォード大学生及び本学部チューターの声》

神戸大学文学部 HP から抜粋 (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/let2016/report.html>)：

- オックスフォード大学生：「私が日本に来たのはこれが初めてだったので、留学生活がいったいどんなものになるのか、全くわかりませんでした。初めは緊張していましたが、神戸大学に来てから、いろいろと援助してもらったおかげで、本当に楽しく過ごせています。特にスーパーバイザー(同じ学部の先生)とチューター(同じ学部の方々)にはお世話になりました。」
- KOJSP チューター：「同世代で共通点も多いですが、やはり文化差は存在します。特に差別に対する感覚や考え方については日本とイギリスではかなり違うので、私たち日本人が意図せずに彼らを傷つけてしまうこともあります。そういう時は親身になって彼らの話を聞き、相互理解を深めるのがチューターの役目です。」

事例② 文部科学省「グローバル人材育成推進事業」採択に伴う問題発見型リーダーシップを發揮できるグローバル人材育成の取組

平成 24 年度文部科学省「グローバル人材育成推進事業（タイプ B 特色型）」に採択された「問題発見型リーダーシップを發揮できるグローバル人材の育成」プログラム（平成 26 年度より「スーパーグローバル大学等事業 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」に名称変更）に基づき、本学部では、人文学をグローバルな視点で学ぶことにより、高度な国際感覚を育成するための外国語授業科目群（グローバル人文学科目群）、そしてオックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける 3 週間の短期留学プログラムである「オックスフォード夏季プログラム」など、グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成するための授業科目群（グローバル対話力育成科目群）からなる「グローバル人文学プログラム」を実施している。このプログラムは、すべて外国語で授業が行われており、所定の単位を取得し、「外国語力スタンダード」（TOEFL 等の外国語試験における所定のスコア）を達成した者には、修了時に「グローバル人文学プログラム修了証」を授与している。

その結果、本プログラムが目的として掲げる「人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材」が育ちつつある（資料 23、及び交換留学生数）。

《資料 23：「オックスフォード夏季プログラム」参加者アンケート集計結果（抜粋）》

設問 5. 満足度等について

夏季プログラムの全般的な満足度は	大いに満足	満足	どちらとも言えない	不満	大いに不満
平成 25 年度	11	5	0	0	0
平成 26 年度	12	5	0	0	0
平成 27 年度	11	7	0	0	0
夏季プログラムに来年も参加したいと思いますか	参加したい	どちらとも言えない	参加したくない	※ プログラム参加費が高額のため、金銭的に参加が難しいという理由をあげる学生が多かった。	
平成 25 年度	5	8	3		
平成 26 年度	4	10	3		
平成 27 年度	6	7	5		
夏季プログラムを他の学生に勧めたいと思いますか	薦めたい	どちらとも言えない	薦めたくない		
平成 25 年度	13	3	0		
平成 26 年度	14	3	0		
平成 27 年度	17	0	0		

薦める理由：自由記述欄から抜粋

- ・この経験を通じて、大学生活における海外との関わり方を考えるきっかけになると思うので、1～2 回生の早い段階での参加を勧める。
- ・学部生が高い意識を持つのに有益。
- ・とても価値ある体験だと思う。

事例③ 環境整備による教育の改善

本学部では、平成 22 年度に B 棟及び人文学科学図書館を改修し、教育、学習の環境を飛躍的に改善した。情報処理室を B 棟に移転し学生の利用できるパーソナル・コンピューターを拡充すると共に、ほとんどの教室でプロジェクター、スクリーン、DVD などを使った授業ができるようにした。その結果、様々な視覚資料やパワーポイント等を縦横に活用し、学生

の興味を惹き、関心を上手く引出す授業方法の開発も進み、多くの授業で実践されている。また、図書館の改修にあわせて、神戸大学では初となるラーニングcommonsを設置し、平成25年度から運用を始めている。このラーニングcommonsは他学部生にも広く開かれており、アクティブ・ラーニングや演習、自主学習、グループ学習、留学報告会等、様々な形で活用され、大きな学習成果を挙げている《資料24》。

《資料24：ラーニングcommonsでの授業風景：「人文学導入演習」》



(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

該当無し。